
遊戯王GX ～風の騎士～

ガーゴイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX ～風の騎士～

【Nコード】

N2276L

【作者名】

ガーゴイル

【あらすじ】

デュエルアカデミア高等部に編入した1人の少年。

伊吹 風斗。

彼とその仲間達が繰り広げる学園決闘ストーリー！

御意見・御感想等お待ちしております。

TURN 1 アカデミアに吹く風（前書き）

海馬コーポレーションが設立した新時代の決闘者を育成する学園。デュエルアカデミア
そして今、海馬ランドでは、デュエルアカデミア高等部への編入試験を行っていた。

TURN 1 アカデミアに吹く風

「ふあゝあ……。暇だな、こんな感じなのか試験つて。」

1人の銀髪の少年が缶ジュースを片手に試験会場のギャラリーに現われ、実技試験の行われている1階に目を向ける。

「ん？なんか盛り上がってんな。」

そこには1人の金髪試験官と茶髪の学生服を着た少年が決闘デュエルをしていた。

「あの試験官のフィールドには攻撃力3000の『古代の機械巨人』アンティーク・ギアゴレム

エレメンタルヒーロー

がいて、対戦者の方は守備力800の『E・HERO バーストレディ』が存在してライフは試験官が3000で向こうの茶髪が2000で学生服のターンか……。」

そして学生は『戦士の生還』で墓地の『フェザーマン』を手札に加え、場の『バーストレディ』と融合を使い『E・HERO フレイム・ウイングマン』を召喚。手札から『摩天楼 - スカイスクレイパー -』を発動。『古代の機械巨人』を倒し決闘に勝利した。

3

それを見ていた銀髪の少年は……。

「へ〜〜！強いな、アイツ！俺も決闘やりたいぜ！」

瞳を子どもの様に輝かせていた。

すると1本のアナウンスが会場に入る。

「これより本日最後の試験を行います。特別推薦生の生徒は至急、決闘場に向かって下さい。」

周りの受験生達は今の決闘が最後だと思っていたのか帰る準備をしていたが、特別推薦生の決闘が始まると分かり急いで席に着いた。ただ1人を除いて……。

「やつと俺の出番か。」

そういうと、銀髪の少年は先程の決闘の観戦中に空にした空き缶を近くのゴミ箱に投げ入れるとそのまま決闘場へと向かった。

「さて・・・ついたけど、俺の相手は誰かな。」

そんな事を言っていると決闘場の床が開き1人の試験官が出てきた。

「（アレはさつき決闘していた・・・。）」

「ワタクシはクロノス・デ・メディチ。アナタの実技試験の試験官をやるノーネ！（彼を倒せーバ、少しは名誉挽回できるノーネ。）」

「へッ！嬉しいぜ、あんたみたいな強い決闘者が相手なんて！」

「（なんなノーネ・・・？このボーイは。さつきのドロップアウトと同じような事を言つて。）さつそく、決闘を始めるノーネ！」

「ああ！つと・・・そうだ！まだ自己紹介してなかったな。俺の名は伊吹風斗！さあ！やろっぜ！」

「「決闘！！！」」

クロノス

LP4000

風斗

4000

「先攻はセニョールに譲るノーネ。」

「なら、遠慮なく・・・ドロー！」
デュエルディスク

決闘盤から1枚カードを引き抜き、手札のカードを決闘盤にプレイする。

「『ドラグニティ・トリブル』を守備表示で召喚！」

風斗の場に1体の鳥人が腕をクロスして現われた。

「『トリブル』の召喚・特殊召喚に成功した時、デッキからレベル3以下のドラゴン族モンスターを墓地へ送る。」

『トリブル』から発生したつむじ風が風斗のデッキから1枚のカードを墓地に送る。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」
風斗のターンが終了したことでターンプレイヤーがクロノスに変わる。

「ワタシのターン！ドロー！」

風斗の決闘盤とは違うアカデミアの成績優秀者なら誰でも貰えるデュエルコートからカードを引くクロノス。

「いくノーネ！ワタクシは、『トロイホース』を召喚！」

クロノスの場に木で作られた1体の馬形モンスターが現われる。

「そして手札から魔法カード『マジック二重召喚デュアルサモン』を使うノーネ！」

「『二重召喚』？」

思わず聞き返してしまう風斗。

「このカードの効力〜で、もう一度通常召喚を行えるノーネ。」

「確かあの『トロイホース』は地属性のモンスターを生け贄召喚する際に1体で2体分の生け贄にできたはず……。」

「ホウ……。流石は特別推薦の生徒なノーネ。そのとうりなノーネ、そしてこの『トロイホース』を生け贄〜に、出でよ！『古代の機械巨人』！！！」

トロイホースが光となって消えると、床が割れて機械の巨人が出てきた。

そして巨人の出現は会場に騒めきを呼んだ。

「スゲー！またあのモンスターが出てきた！」

「やっぱりあの先生強すぎるよ……。」

だが、対戦者の風斗は余裕の表情を浮かべていた。

「フツ、悪いが『古代の機械巨人』には帰ってもらっぜ。」

「ナパツ！？」

「トリアップ畏発動！『風霊術・雅《ふうれいじゆつ・みやび》』！」

風斗の『トリブル』が風となりクロノスの『古代の機械巨人』を押し戻してしまった。

「ワタクシの『古代の機械巨人』が〜！」

「『風霊術・雅』は自分フィールドの風属性モンスターを生け贄にフィールド上のカードを持ち主のデッキの一番下に戻す。」

「又又ツ！カードを3枚伏せてターンを終了するノーネ・・・。」
「さてと、俺のターンドロ〜！・・・悪いがこのターンで決めさせてもらうぜ。」

「何を言ってるノーネ！ワタクシのライフはまだ無傷の4000ポイントでリバースカードも3枚あるノーネ！できるわけ無いノーネ！」

「それはどうかな？」

不敵な笑みを浮かべる風斗。

「（できるわけ無いノーネ！・・・ワタクシのカードは1つが『聖なるバリア・ミラーフォース』、攻撃されたら敵を全滅させるノーネ、次は『激流葬』、モンスターを召喚したら同じく敵を全滅させるノーネ！もう1枚は『大嵐』がきてもいいように破壊された時にトークンを生み出す『黄金の邪神像』なノーネ！これで負けるはず無いノーネ！〜）」

鉄壁の守りを張るクロノス・・・だが、

「まずは『ハリケーン』を発動！場の魔法・罫を全て手札に戻す！」

「オーウ！ディーオ！？（手札に戻されたら、何も出来ないノーネ・・・。）」

「『ドラグニティ・ドウクス』を召喚！」

風斗の場に新たな鳥人が現われる。

「『ドウクス』の召喚に成功した時、墓地のレベル3以下の『ドラグニティ』と名のついたドラゴン族モンスターをこのカードに装備する事ができる。」

「で、でも！アナタの墓地にそんなカード・・・！？あの時に・・・。」

「そうだ！『トリブル』の召喚時に墓地に送った『ドラグニティ・フアランクス』を装備！」

墓地から現れた小型のドラゴンに『ドウクス』が飛び乗る。

「更に『フランクス』の効果で装備カードとなっている時、装備を解除して自身を特殊召喚！」

『ドウクス』を降ろして、『フランクス』がフィールドに出てくる。

「でも、2体の攻撃力を合計して〜モ、ワタクシのライフは残るノーネ！」

勝ち誇った様に言い放つクロノス。

「慌てんなって、今から良いものを見せてやるからよ！」

「良いもの？」

「ああ、【シンクロ召喚】をな！」

風斗の発言に騒めく会場。「シンクロ召喚！？そんなの聞いたことないぜ！？」

「僕もツスよ！？なんスか！？シンクロ召喚って！」

「（俺も聞いた事が無い・・・何なんだ？シンクロ召喚とは。）」
十代・翔・三沢は初めて聞く召喚に疑問と好奇心を抱く。

「いくぜ！レベル4の『ドウクス』にレベル2の『フランクス』をチューニング！」

風斗の言葉を鍵に『フランクス』が風のリングとなり、『ドウクス』を包み込む。

「い、いつたい何が起こるノーネ・・・？」

「大いなる風よ、疾風の槍となつて全てを貫け！シンクロ召喚！！」
すると『ドウクス』の体が風になり風斗の周りに竜巻を起こし、竜巻の中から1体のモンスターが現われる。

「出ですよ！『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』！」

そのモンスターは白き竜と竜を操る竜騎士だった。

「ふ、ふーん！そのモンスターの攻撃力は2000！それではワタクシのライフを0には出来ないノーネ！」

「そして手札からフィールド魔法『デザートストーム』を発動！」

決闘場に旋風が舞う。

「これで全ての風属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンする。」

ドラグニティナイト - ゲイボルグ

ATK / 2000 2500

DEF / 1100 700

「バトルだ！『ゲイボルグ』でダイレクトアタック！」
風斗の攻撃命令を受けて竜は口に風を集める。

「そして『ゲイボルグ』のモンスター効果を発動！このモンスターの戦闘を行うダメージステップ時に、墓地の鳥獣族モンスターをゲームから除外する事でそのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで得ることができる！」

「と、いうコトは・・・？」

冷や汗を垂らすクロノス。「墓地の『ドラグニティ・ドウクス』を除外して、攻撃力上昇！」

ドラグニティナイト - ゲイボルグ

ATK / 2500 4000

「これで終わりだ！トルネード・スパイラル！！」

竜から放たれた竜巻のブレスはクロノスに直撃する。「ペーペロンチーノ！！」

クロノス

LP 4000 0

今の風斗の決闘を見ていた他の受験生達はシンクロ召喚やクロノスをノーダメージ勝利の話で持ちきりだった。

「スゲー強いよな！アイツ！？あの先生に無傷で勝つなんて！」

「それにシンクロ召喚だつて初めて見たツス……。」

「（彼とも良き好敵手ライバルになれそうだな……！！）」

別の場所では、

「あのクロノス先生が二度も受験生に負けるなんて……。」

「ありえねえ……、ですよ？万条目さん、クロノさん。」

オベリスク・ブルーの制服を着た生徒が自分達の上の席に腰掛けている2人に話し掛ける。

「フンツ！別に不思議な事でもあるまい……。」

「へ？」

返ってきた返事が予想と違ったのかブルー服の体格のいい男子生徒は気の抜けた声を上げた。

「クロノス先生はお優しい事に手を抜いて下さっていたのさ。」

それを聞いたブルーの男子は表情をハツとさせる。

「で、ですよね……！」

「やっぱりクロノス先生は凄いな！」

また別の場所では、

「彼も面白いわね。」

「……。」

1人の金髪の少女が隣の青年、デュエルアカデミアで皇帝カイザーの名を持つ丸藤 亮に話し掛けるが亮は何も言わずに会場を出てしまった。

「もっつ……。」

「まあまあ、明日香ちゃん。」そんな亮に呆れている明日香を宥める茶髪をサイドテールにした少女、高町 なのは。

「でも私なのは以外のシンク口使い初めて見たよ……。」

明日香とは違い長い金髪を腰の位置で黒いリボンで纏めた少女が珍しいものを見たように言う。

「にはははは、フェイトちゃん世界は広がって事だよ。」

フェイトと呼ばれた少女は「そうだね、なのは」と頷くと隣の茶髪をショートカットにし、前髪の片方に髪飾りを着けている少女の方を向くと、

「ふふふ、学園に残つとる皆に良いお土産話ができたな。」

「そうだね、はやて。じゃあ船が出る前にはやく戻るうか？」

「ええ、そうね。行きましようか。」そして彼女達も会場を出ていった。

試験に勝利した風斗は1人会場の廊下にいた。

「なかなか楽しい決闘だったな……。」

先程のクロノスとの決闘を思い出す風斗。

「デュエルアカデミアに行けばもっと強い奴が山ほどいるんだろうな……。くうくう!!! 楽しみだぜ!!!」

武者震いしている風斗の横に半透明の『ゲイボルグ』とは違う白銀のドラゴンが現われる。

『ヴァアオオオ!!!』

そのドラゴンは自らを鼓舞するようにひとつの咆哮をあげる。その様子を見た風斗は……。

「お前も楽しみなんだな・・・」
『スターダスト・ドラゴン』。
「
『スターダスト・ドラゴン』と呼ばれた竜は頷き、又咆哮をあげる。
『ヴアアアアオオオオ!!!!』」
「ああ! いこうぜ!」
『スターダスト』! 最強を目指して!」

風斗の物語は此処から始まる・・・。

続く

TURN 1 アカデミアに吹く風（後書き）

無事デュエルアカデミアに入れた風斗。

だが、いきなりオベリスク・ブルーの生徒に絡まれてしまう！

そしてブルーの生徒と決闘する事になったのだが……。

次回！

遊戯王GX く風の騎士く

『奪われたフェイバリット!!』

デュエルスタンバイ！

TURN 2 アカデミアの洗礼

長い船旅を終えてやっとデュエルアカデミアへと到着した風斗。

「ふ〜！ やつと地面に足がつけられた〜！」

ひとつ大きく伸びをする風斗。

そんな彼に近づいてくる人影が・・・。

「おい！ お前！ 入学試験で最後に決闘してた奴だよな！？」

「ちよつとアニキ！ いきなり過ぎるよ！」

「ん？」

振り返つてみるとそこには赤い制服を着た入学試験で風斗より先にクロノスを倒したHERO使いと、背が低く水色の髪に眼鏡が特徴の少年がいた。

「えーと、お前は確か、HERO使いの・・・。」

「遊城 十代だ！ よろしくな！」

「僕は丸藤 翔ツス、よろしくお願いするツス！」

「ああ、こちらこそ！ 俺は伊吹 風斗！ よろしく頼むぜ！ 十代、翔

！」

握手をする3人。

「ところで何か俺に用だったのか？」

「いけねっ！ 忘れてた！ なあ、俺と決闘してくれよ！」

「今からか？・・・この後始業式もあるんだぜ。」

「うーん、じゃあ始業式が終わったらならオツケーなのか！？」

「まあ・・・そうだな。」

「決つまりー！ じゃあ始業式の後でな〜！ 行くぞ！ 翔！」

「待ってよ！ アニキ〜！」

そういうと十代達は校舎の方へ走っていった。

「やれやれ・・・。」

ため息をひとつすると俺も始業式の会場がある校舎へと歩いていった。

「〜〜で、×××があるのでして　　をもってして　　なのです〜〜」 現在学園の生徒全員はアカデミアの校長、鯨島のありがたくも長い新人生歓迎の言葉を聞いていた。

「それでは皆さんこれからの学生生活を謳歌して下さい。」
30分後、やっと校長の話が終わりクロノス先生から学園生活を送る際の注意事項を聞いて各自解散した。

「さてと、まずは先に荷物を寮に置きに行くか……。アレ？」
そこで俺はある事に気付く。

「そういえば俺の寮って何処だ？」

そう！俺は自分が何処の寮配属なのか分からないのだ。
途方に暮れている俺の肩に誰かの手が置かれる。

「ん？誰だ。」

「ああ、いきなりすまない、俺は三沢 大地。君と同じ新入生だ。」
三沢と名乗る髪をオールバックにしている男が現れた。

「俺は「伊吹 風斗、だろ？」むっ。」

俺が自己紹介しようとするのを先に言われてしまった。

「あの入試試験は俺も見てたんでな……。」

「なる。それで声をかけたって訳か……。」

「まあ、それもあるんだがさっきからそこで困ったようにしてたら、どうしたのかと思ってな。」

良い奴だなあ、コイツ。

「実は自分が何処の寮に行けば良いのかわからなくて……。」

「なんだそんな事だったのか、君は俺と同じラー・イエローの生徒だから一緒に行くか？」

「ああ！是非！！」

そして俺は三沢に着いていった。

「イエロー寮への道で」

「でもなんで俺がお前と同じイエロー寮の生徒って分かったんだ？」

「答えはお前の制服だ。」

「へ？」

「アカデミアでは着ている制服の色で寮が分けられているんだ。」

「ふーん、そうなのか。」

俺は自分の制服を見つめる確かに三沢と同じ黄色だ。

「さあ、着いたぞ。」

三沢の言葉で前にある建物を眺める。

「へえー、なかなか良い所じゃん！」

広さ、大きさ、外見どれも悪くない。

「じゃあ早くこの荷物を片づけてくるか。」

寮の中に入り自室の番号を教えてもらい、鍵を寮長の榊山先生かはやまから受け取り部屋へと向かう。

「えーと？・・・おゝ、あったあった！27号室ここが俺の部屋か。」

難なく自分の部屋を発見できたので、受け取った鍵を使い中に入る。

「内装は悪くない。」

大型のベッドにパソコン、機能性十分な机。

「さてと、荷物を置いたらやる事無くなっちゃったな・・・。」

ベッドの上に持って来た荷物を投げ捨てる俺。

それから・・・10分後、俺はアカデミアの校舎の中を歩いていた。何故そんなことをしているのかという・・・、

やる事無い 暇 探検しよう

そんな安易な考えが俺の体を動かしていた。

「ここが保健室で、あそこが図書室か……。」

校舎内を散策していると、前方の施設から聞き覚えのある声が聞こえてきたので向かってみると、其処は決闘場で、青い制服を着た二人の男子生徒と十代、翔がいた。

「よー、十代何やってんだ？こんな所で。」

「あつ！風斗！いや〜聞いてくれよ！俺と翔が此処で決闘しようとしたら、こいつらが現れて決闘させてくれねーんだよ！」

「なんでだ？別に決闘するくらい自由じゃねーか。」

青い制服の二人を睨む俺。

「フンツ！お前達には天井のオベリスクの紋章が見えないのか！」

「この決闘場は我等オベリスク・ブルーの生徒のモノだ！」

なんかコイツ等の態度ムカつく……。

「なら、おまえらブルーの生徒と決闘するんなら何も問題は無いわけだ。」

「何だと……？」

「我等オベリスク・ブルーにイエローが挑むだと？」

「まあ、そう言うことだ。」

「身の程知らずが！！」

「待て！お前達！」

一人の言葉が決闘場に響く。

「誰だ、お前？」

観客席に座っている男子生徒に問い掛ける。

「お、お前！？この方を知らないのか！？」

「アカデミア中等部を首席で卒業した、未来の決闘王デュエルキングと呼び声高い万条目 準さんを！」

「いや、全く知らない。十代お前知ってる？」

「いや、聞いたことねーや。それよりもおかしいな？」
「何が？」

「決闘王って一番強い決闘者だろ？だったらそれは俺だからな！」
「………ぷっ！アツハツハツハツハツハツハツ！！！」
急に笑いだすブルーの奴ら。

「お前如きが決闘王だと笑わせるな！」

「寝言は寝ていいな！」

するといきなり怒りだした。

怒ったり笑ったり、又、怒ったり……大変だな、コイツ等。

「まあ待て諸君。この2人は貴様等より出来る。」

万条目の一言で静かになるブルース。

「オイ、クロノ！出てこい。」

万条目はさっきまで自分がいた観客席に話しだす。

「何だというんだ？万条目。」

観客席から1人の黒髪少年が出てくる。

「誰だ？お前？」

俺の一言にさっきまで黙っていたブルーの2人が喋りだす。

「この御方はな万条目さんの永遠のライバル！クロノ・ハラオウン
さんだ！」

その紹介に当の本人は……。

「イヤイヤ、そんな大したものじゃないさ。」

少し照れていた。

「僕はクロノ。君とこのHERO使いの彼の事は、入学試験の時
に見ていた。」

片手を俺の前に差し出すクロノ。

「（コイツは良い奴ぼいつな。）ああ！よろしく。」
握手をする俺達。

「ゴホンッ！！」

少し空気にしていた万条目が咳払いをする。

「お前達のクロノスを倒した実力ここで披露して貰いたいんだが。」

「もちろんいいぜ！」

十代、お前元気だな。

「貴様にも決闘して貰うぞ！風斗！！」

「んあ？十代と俺の2人をお前が相手すんのか？」

「馬鹿か、お前の相手はクロノに任せる！」

おいおい……。

「いいのかよ？クロノ。」

「もちろんだ、僕も君達と決闘したかったんだ！」

やれやれ……、本人が良いと言うなら仕方ないか。

「ククク、まぐれでもクロノスを倒した実力見せてもらおうか。」

「実力さ。」

「右に同じく……。」

「いくぞ。」

「……デユエツ！」

4人が決闘盤を起動させ、決闘を開始しようとしたその時、

「貴方たち何をしているの！」

女性の声が響く。

声のした方を向くと其処には、2人の金髪の少女と茶髪の少女がいた。

万条目が少女の方を見ると、何かハツとした顔になり決闘盤を待機モードにし、彼女らのもとに歩いていった。

「やあ！天上院君にテストロッツサ君、高町君。どうしたんだい？

こんな場所に？」

「ちよつと校舎を散歩してたの……。」

「そしたら此処から声が出たから、見に来たんだ。」

「で、万条目君？いったい貴方は何を？」

少し顔を赤くした万条目が、

「いやゝなに、どうもこのイエローとレッドの奴らが礼儀を知らな

いようなのでね。僕が教えてあげようと……」

「もうじき新入生歓迎会が始まるわよ。」

「チツ！……いくぞ、おまえら！」

「は、ハイ！」

「待ってください！」

「仕方ないか……、風斗！君とは必ず決闘するぞ。」

「モチ！」

万条目達は自分達の寮へと帰っていった。

「えーと、君達は誰？」

「私は高町なのは！よろしくね、風斗君。」

「よろしく。でもなんで俺の名前を？」

茶髪の少女が自分の名を知っている事に驚いていると金髪の少女の片方が説明してくれる。

「私達は君達の入学試験の決闘を見てたんだ。」

「成る程な……、君は？」

「私はフェイト・テストロッサ、よろしく。」

「こちらこそ。」

「で、私は天上院明日香。」

「綺麗な人ばかりス……。」

翔が何かほざいているが気にしない。

「貴方たち、さっきの万条目君達には関わらない方がいいわよ。」

「どういうことだよ？」

「彼ら碌でもないんだから。」

「でも、クロノは良い奴だったぜ？」

「彼は万条目君達のストッパーなのよ。」

「そうなのか。」

「ふう、じゃあ彼らには気を付けてね。貴方たちの寮でも歓迎会が始まるはずだから急いだら？」

「マジか！？ダッシュで戻るぞ！翔！」

「ハイツス！」

そうして俺達は決闘場を出た。

イエロー寮で歓迎の食事を済ませ部屋で横になっていると・・・。
ピー！ピー！ピー！

俺のPDAが鳴る。

「なんだあ？メール。」

「おい！風斗、今夜0時に決闘場で待つ。互いのベストカードをかけたアンティだ。勇気があるなら来るが良い。」

「なんだよこのメール。まっ！挑まれたら受けてたってやる！」
俺は決闘盤とデッキを持って決闘場に向かう。

決闘場には昼間の万条目達と十代、翔がいた。

「おい、十代に翔。お前達なんているんだ？」

「風斗！？お前こそ何で！？」

「万条目に呼ばれた。」

「俺も。」

「貴様等！覚悟はいいな！？決闘だ！」

「アンティは気が乗らないが昼間の続きだ。」

「仕方ないよな。」

「いくぜ！」

「「「「決闘！！！！」」」」

クロノVS風斗

クロノ

LP4000

風斗

LP4000

「僕の先攻ドロワー！カードをセット！『ブリザード・ドラゴン』を攻撃表示で召喚だ！」

クロノの場にドラゴンが現れる。

「なら、俺のターン！ドロワー！」

手札とドロワーしたカードを確認する。

「魔法カード『天使の施し』を発動、3枚ドロワー！そして2枚を墓地へ捨てる。」

「この流れだと・・・来るか？、シンクロ召喚。」

「俺は『ドラグニティ・ドゥクス』を召喚！『ドゥクス』の効果で『ファランクス』を装備！そして『ファランクス』を自身の能力で特殊召喚！」

「これは！」

「おおー！いきなりいくのかよ！じゃあ俺もいくぜ！『融合』を発動！」

風斗の決闘を見て感化された十代も速攻をかける。

「レベル4『ドゥクス』にレベル2の『ファランクス』をチューニングー！」

『ファランクス』が風のリングになり『ドゥクス』を包み込み竜巻を起こす。

「大いなる風よ、疾風の槍となって全てを貫け！シンクロ召喚！！『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』！！」

「この瞬間を待っていた！」

「何っ!？」

「『調律師の陰謀』を発動！」

「なんすか？あのカード？」

「決闘者として基本の知識よ。」

翔の後ろに明日香が現れる。

「あ、明日香さん。」

「あれは、相手がシンクロ召喚した時にそのシンクロモンスターのコントロールを奪うカードよ。」

「そんな・・・、せつかく召喚したモンスターが・・・。」

「くっ!『ゲイボルグ』が・・・!」

ちらりと十代の方を見ると、俺と同じように『フレイム・ウィングマン』のコントロールを奪われていた。

「くそっ!カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「僕のターン!手札から『ブリザード・ウォリアー』を召喚!」

クロノの場に氷の鎧を身につけた戦士が現れた。

「これで決めさせてもらうぞ!『ゲイボルグ』でダイレクトアタック!」

「ゲイボルグ」のブレスが俺に向かって伸びる。

「『魔法の筒』マジック・シリンダー発動!」

風斗の前に謎の筒が現れ、ブレスを吸い込み、もう片方の筒が吸い込んだブレスをクロノにぶつける。

クロノ

LP4000 2000

「くそっ!だが攻撃は続くぞ!『ブリザード・ドラゴン』と『ブリ

ガード・ウォリアー』でダイレクトアタック！
2体が風斗のライフを削る。

「ぐはあっ！！」

風斗

LP4000 2200 800

「やるなあ、クロノ。」

「ふふっ、このターンで勝ったと思ったんだがね。カードを1枚セツトしてターンエンドだ！」

「俺のターン！カードドロ！・・・きたぜ！」

「何を引いたんだ？」

「『ドラグニティ・レギオン』を召喚！俺の場に緑の翼を生やした鳥人が拳を構えて現れる。」

「『レギオン』の効果で墓地のレベル3以下の『ドラグニティ』と名のついたドラゴン族モンスターを装備！」

『レギオン』は風斗の墓地から出現した『フアランクス』の上に乗る。

「まさか、新たにシンクロ召喚を行う気なのか！？」

「いいや！俺は『レギオン』の効果を発動！自分の魔法・罫ゾーンの『ドラグニティ』を1枚を墓地に送る事で相手フィールドの表側表示で存在するモンスターを1体を破壊する。俺は『レギオン』に装備されている『フアランクス』を墓地に送り、『ゲイボルグ』を破壊する！！」

「何だと！？」

『レギオン』は自分に乗せていた『フアランクス』を持ち上げると、そのまま『ゲイボルグ』に向けて投げ飛ばす。

投げられた『フアランクス』が『ゲイボルグ』に直撃すると2体の

ドラゴンは爆発した。

「『調律師の陰謀』でコントロールを奪っていたモンスターが破壊されたらゲームから除外される。」

「へへっ！それは予想済みだぜ！見せてやる！俺のドローカードを！」

「いったい何を引いたんだ・・・？」

「装備魔法『D・D・R』《ディアファレント・ディメンション・リバイバル》を発動！」

「『D・D・R』？」

「手札を1枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する！」

風斗の隣の空間にひびが入る。

「次元を切り裂き蘇れ！『ゲイボルグ』！」

ひびが徐々に大きくなりついには、次元の壁を突き破り『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』が再び風斗の場に現れる。

「いけ！『ゲイボルグ』！『ブリザード・ドラゴン』を攻撃！」

「させるか！永続罠！『グラビティ・バインド・超重力の網』を発動！これでレベル4以上のモンスターの攻撃を封じる！」

『ゲイボルグ』の頭上に巨大な網が降り掛かる。

「ならば、罠カード！『風霊術・雅』発動！『ドラグニティ・レギオン』を発動コストに『グラビティ・バインド』をデッキの下に戻す！」

『レギオン』が突風となつてグラビティ・バインドの網をクロノのデッキに戻してしまった。

「これで『ゲイボルグ』の攻撃は有効！ダメージ計算時に墓地の鳥獣族モンスターを除外して、除外したカードの攻撃力が『ゲイボルグ』の力となる！墓地の『風帝ライザー』を除外し、攻撃力2400ポイントアップ！」

『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』

ATK / 2000 4400

「『ライザー』だと！？いつたいいつそんなカードを……！！……
……D・D・R』の発動コストか……。」

「正解だぜ……。」

『ゲイボルグ』は口に風を溜める。

「『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』の攻撃！

トルネード・スパイラル！！」

『ゲイボルグ』の竜巻のブレスが『ブリザード・ドラゴン』を貫く！
「ぐわあー！！！」

クロノ

LP / 2000 0

こうして、俺とクロノの決闘は終了した。

「楽しい決闘だったぜ？クロノ。」

「僕もだ。やっぱり君は強いな……、シンクロモンスターのコントロールを奪って勝てると思っていたら、返しのターンで自分の元に戻ってしまうなんて。」

「まあな、ところで十代と万条目の決闘はどうなったんだ？」

「あそこでまだやってるな。」

奥の決闘場を指差すクロノ。

「えーと？戦況は？……十代がピンチか。」

万条目のフィールドには攻撃力1800の『^{ヘルジエネラル}地獄將軍・メフィスト』

がいて、十代にはモンスターもリバースカードも無しでライフは残り僅かで、十代のターン。

「ドロー！・・・へっ！」

ドローしたカードを見て笑みを浮かべる十代。

だが、カードをプレイする前に、

「大変よ！ガードマンが来るわ！こんな時間に学園の施設の使用しているのがばれたら退学よ！？」

「くそっ！・・・十代この決闘は貴様に預けてやる！感謝しな！」

「アツ！待てよ決着はまだ着いてないぜ！？」

「貴様の実力は分かった！今度はお前だからな伊吹。覚悟しておけ！戻るぞ、クロノ！」

「分かった！」

捨て台詞を吐いて決闘場を出ていく万条目を追い掛けて同じく決闘場を出ていくクロノ。

「俺達も早く逃げるぞ！十代、翔！」

「嫌だ！絶対離れない！決着着いてないんだ！！」
駄々を捏ねる十代。

「仕方ない・・・。」

溜め息を吐いて十代を見る。

「十代、今から俺に殴られて引き摺られて此処を出ると自分の足で出るのどちらがいい？」

指をポキポキ鳴らしながら、笑顔で俺は問う。

「いつ！？わ、分かったよ！急いで此処を離れればいいんだろ！」

「じゃあ急いで行くぞ！」

俺達も決闘場から出ていく。

無事ガードマンに見つからずに脱出できた俺達。

「で？どうだった、アカデミアの洗練を受けた感想は？」

明日香が俺と十代に決闘の感想を聞いてくる。

「まあまあだな（かな）。」「」

「どうかしら、あのまま決闘を続けていたら貴方のベストカードが奪われていたかもしれないわよ?」

「いいや!あの決闘は俺の勝ちだぜ!」

さっきのドロークカードを見せる十代。

「死者蘇生……。」

「まっ!次に決闘する時に決着を着けるさ。じゃあな。」

「待つてよ!アニキ!」

その場から寮へと帰っていく十代、それを追い掛けていく翔。

「じゃ、俺も帰るか……。天上院……。だっけ?お前も気を付けて帰れよ?」

お前もイエロー寮に帰る為に振り返る。

「明日香でいいわよ。」

「……。じゃあな、明日香。Good Night……。」

こうして、俺達のアカデミア記念すべき1日目を終了した。

続く

TURN 3 翔を取り戻せ！

今、風斗はイエロー寮の自室でカードをいじっている。

「うーん、やっぱりコイツを入れるとバランスがなあ〜。」

デッキの調整中の風斗の部屋に1人の訪問者がやってきた。

「おい！風斗！大変だ！翔が、翔が攫われた！」

「十代！？それよりも翔が攫われたってどついう事だ！？」

風斗の部屋に現れたのは寮の違う十代。

「実は、俺のPDAにこんなメールが……。」

俺に自分のPDAを見せる十代。

「丸藤翔は預かった。返してほしければオベリスク・ブルー女子寮まで来い。」

メールを読んだ風斗は……。

「なんだこのメールは？」

「俺にもよくわからねえ。」

「で？お前はなんで俺の部屋に来たんだ？呼び出し場所はブルー女子寮だろ？」

「い、いや、俺女子寮の場所知らなくて……。」

苦笑いを浮かべ頭を掻く十代。

「は、分かった。女子寮まで俺が連れてってやる。」

「わりな、風斗。」

「気にすんな、それに翔が心配だ。早く行くぞ！」

「おう！」

風斗と十代はイエロー寮を飛び出していった。

イエロー寮に着くと目の前には、ロープでグルグル巻きにされた翔と明日香、なのは、はやて、フェイト、そして、枕田 ジュンコと浜口 ももえが立っていた。

「来たわね！十代！……ってなんで風斗までいるの！？」

「本当だ。」

「十代が女子寮の場所を知らないから俺が連れてきた。」

「そうなんだ。」

風斗の説明に納得してくれたフェイト達。

「そんな事より早く翔を返せ！」

「それはダメよ！」

ジュンコが反対する。

「なんでだ？何か理由があるのか？」

「大有りよ！」

ジュンコは翔を指差し、

「コイツはね！女子寮のお風呂を覗いたのよ！」

「・・・へ？風呂を・・・覗いた？」

「そうですわ！覗きをする殿方なんて最低ですわ！」

「だから！僕は覗きなんてして無いッス！」

翔は無実を主張する。

「じゃあなんであんな時間に女子寮の周りをぐるぐるしてたのよ！」

「！」

「僕はただ手紙で呼ばれただけなんスよ〜！」

「手紙？」

「コレよ。」

明日香が風斗に一枚の封筒に入った手紙を渡す。

受け取った手紙の封筒には、真っ赤なキスマークがついていた。

「（なんでだろう・・・このキスマークを見ると気持ち悪い。）えーと？何々、丸藤翔様へ、一目見た時から好きです。今夜オベリスク・ブルー女子寮でお待ちしています。天上院明日香より・・・で翔は、このあからさまな手紙にホイホイ騙された訳だ。」

「情けないけどその通りッス・・・。」

その後、明日香達と話し合い決闘で俺と十代が勝てば翔を解放して貰える事になった。

「十代の相手は明日香になったけど、俺の相手は誰だ？」

風斗の前になのはが立つ。

「私だよ！風斗君！」

「オツケー！早速始めようぜ！」

「決闘!!!」

なのは LP4000

風斗 LP4000

「先攻・後攻、好きな方をどうぞ。」

「じゃあ遠慮無く先攻を貰うよ!ドロー、カードをセット!そして、『魔法戦士 ブレイカー』を召喚!そして、『魔法戦士 ブレイカー』の効果で魔力カウンターを『ブレイカー』に1つ乗せて、ターンエンドだよ!」

『魔法戦士 ブレイカー』が持つ剣に光が宿り魔力カウンターが乗っていることを知らせる。そして、魔力カウンターが乗ったことで『魔法戦士 ブレイカー』の攻撃力が上がった。

『魔法戦士 ブレイカー』

魔力カウンター×0 1

ATK/1600 1900

「(『ブレイカー』・・・か、つてことはなのはのデッキはマジシヤンデッキなのか?取り敢えず速攻をかけてみるか・・・!)俺のターン!手札から魔法カード『調和の宝札』を発動。」

「『調和の宝札』?初めて見るカード。」

「『調和の宝札』は手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを墓地に送って、カードを2枚ドローする魔法カードだ。俺は手札の『ドラグニティ・フアランクス』を墓地に送ってカードを

ドロー！」

「（良いカードが来たな。）『ドラグニティ・ドゥクス』を召喚！」

「そのモンスターは！」

「分かるなら説明は要らないな！『ドゥクス』の効果で墓地の『フアランクス』を装備！そして装備を解除して特殊召喚！」

風斗の場に2体のモンスターが並ぶ。

「いくぜ！なのは！」

「ツ・・・！！」

「大いなる風よ、真空の力となって空を裂け！シンクロ召喚！来い『ドラグニティナイト・ガジャルグ』！！」

風斗のフィールドに現れたモンスターは赤い竜を従えた竜騎士だった。

その姿を見たなのはは、驚いた。

「『ゲイボルグ』じゃ無い！？」

「まあな、色々と。」

一方、観客となっているフェイト達は、

「風斗はいつたい幾つのシンクロモンスターを持っているんだろう？」

「せやなく、私達の知つとるシンクロモンスターは『ゲイボルグ』と『ガジャルグ』だけやけどまだまだ隠しとる気もするしなく。」

「なのは・・・大丈夫かな？」

「『ドラグニティナイト・ガジャルグ』の効果を発動！1ターンに1度、デッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスターを手札に加え、手札のドラゴン族または鳥獣族モンスターを墓地に送る！」

風斗はデッキから1枚のカードを手札に加えて、手札のカード1枚を墓地に送った。

「バトル行くぜ！『ガジャルグ』で『魔法戦士 ブレイカー』を攻撃！」

風斗の攻撃宣言を受けて『ブレイカー』に向けて駆けて行く『ガジャルグ』。

「ソニック・スラッシュ！！」

『ブレイカー』を風の速さで切り裂く『ガジャルグ』。

「うっつ！」

なのは

LP4000 3500

「でも、この瞬間リバーカードオープン！『魔力継承』！」

「『魔力継承』？初めて見るカードだが、どんな効果なんだ・・・？」

「『魔力継承』は自分の魔法使い族モンスターが戦闘で破壊された時に、デッキから破壊された魔法使い族モンスターのレベル以下のレベルを持つ魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

「成る程、次のターンにモンスターを繋げるつもりか・・・。」

「そうだよ！デッキからレベル4以下の魔法使い、『魔導騎士 デイフェンダー』を守備表示で特殊召喚！」

なのはのフィールドに大きな盾を構えた魔導師が現れる。

「だが、特殊召喚では『デイフェンダー』には魔力カウンターが乗らないはずだぜ？ここで俺が破壊系カードを使えば・・・。」

「ふっつ、それはどうだろうね？」

『デイフェンダー』の持つ盾に光が宿る。

『魔法騎士 デイフェンダー』

魔力カウンター×0 1

「なっ!? 何故『ディフェンダー』に魔力カウンターが!?!」

「『魔力継承』の効果で特殊召喚したモンスターに魔力カウンターが乗せることができるなら、魔力カウンターを1つ乗せることができるんだよ!」

「それでか・・・、ターンエンドだ。」

「私のターン! 風斗君! 私もいくよ! 手札からチューナーモンスター! 『マジカル・フィシアリスト』を召喚!」

「チューナーモンスター!? まさかなのはも俺と同じシンクロ使い!?!」

「うふふ。更に手札から魔法カード『魔力解放』を発動。このカードは自分フィールドのモンスター1体に乗っている魔力カウンターを任意の数取り除いて、取り除いた魔力カウンター1つにつきレベルを1、攻撃力を200ポイントアップするんだよ!」

「レベルを上げてシンクロするつもりか・・・。」

「うん! 私は『ディフェンダー』の魔力カウンターを取ってレベルをアップ!」

『魔導騎士 ディフェンダー』

魔力カウンター×1 0

レベル4 5

ATK/1600 1800

「レベル5になった『魔導騎士 ディフェンダー』にレベル2の『マジカル・フィシアリスト』をチューニング！」

なのはの声で『マジカル・フィシアリスト』が光の輪となって『ディフェンダー』を包み込む。

「魔導を極めし、偉大なる賢者よ！今その魔力を解き放て！シンク口召喚！来て！」
「アーカナイト・マジシャン！」

光の中から現れた白い魔導服を纏ったマジシャンは、手にした杖を風斗に向けて立っていた。

「『アーカナイト・マジシャン』はシンク口召喚時に魔力カウンターを2つ乗せて、自身に乗っている魔力カウンター1つにつき攻撃力が1000ポイントアップするんだよ！」

『アーカナイト・マジシャン』

魔力カウンター×0 2

ATK/400 2400

『アーカナイト・マジシャン』が蒼白い闘志を纏う。

「攻撃力は『ガジャルグ』と同じか……。」

「まだまだだよ風斗君！魔法カード『魔力掌握』を発動！フィールド上の魔力カウンターを置くことができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置いて、その後、デッキから『魔力掌握』1枚を手札に加えることができる！……でも『魔力掌握』は1ターンに1枚し

か発動できないんだけどね。」

『アーカナイト・マジシャン』

魔力カウンター×2 3

ATK/2400 3400

魔力カウンターが増えたことで『アーカナイト・マジシャン』の纏う闘志が一回り大きくなる。

「攻撃力が『ガジャルグ』を越えたか……。」

「いくよ！風斗君！」『アーカナイト・マジシャン』で『ドラグニテイナイト・ガジャルグ』を攻撃！」

『アーカナイト・マジシャン』が構えた杖の先に魔力が集中している。

「白・魔・衝・撃！」ホワイト・インパクト

『アーカナイト・マジシャン』から放たれた魔力弾が『ガジャルグ』に直撃する。

「ぐうううっ！」

風斗

LP/4000 3000

「ターンエンドだよ。」

「ふうっ、やるな！なのは。」

「そう簡単には負けられないからね。」

「それは俺も同じだ！ドロー！……。手札から『死者転生』を発動！手札の『ドラグニティ・ブラック・スピア』を墓地に送って、『ドラグニティ・ドウクス』を手札に加える！」

「また『ドウクス』が……。」

苦い顔をするのは。

「いくぜ！『ドウクス』召喚！効果で『ファランクス』を装備して解除！」

「また、シンクロ召喚がくる……。」

「レベル4の『ドラグニティ・ドウクス』にレベル2の『ドラグニティ・ファランクス』をチューニング！」

『ファランクス』が風の輪となって『ドウクス』を包み込む。

「大いなる風よ、疾風の槍となって全てを貫け！シンクロ召喚！出でよ！『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』！」

風斗の場に白い竜を従えた竜騎士が現れる。

「バトル！『ゲイボルグ』で『アーカナイト・マジシャン』を攻撃！トルネード・スパイラル！」

『ゲイボルグ』から放たれた風の槍が『アーカナイト・マジシャン』

に向かって放たれる。

「そして、『ゲイボルグ』の効果で『風帝ライザー』を墓地より除外！攻撃力が上昇！」

「いつ『風帝ライザー』が墓地に!？」

「『死者転生』のコストはちゃうし……。」

なのはとはやてはどうやら分からないようだが。

「フェイトは分かったみたいだな。」

「うん……、『ガジャルグ』の時だよね？」

「「あつ……。」」

なのはとはやても理解して見事にハモった。

『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』

ATK/2000 4400

「きゃあつー！」

なのは

LP 3500 2000

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

「私のターン・・・、ドロー！（これなら！）『強欲な壺』を發動！カードを2枚ドロー！」

デッキから2枚のカードをドローするのは。

「手札から『マジシャンズ・ヴァルキリア』を召喚！そして、速攻魔法『デメンション・マジック』を發動！」

「ほ〜！なのはちゃんも良い引きしとるな〜！」

「そうだね、はやて。」

「『デメンション・マジック』で『マジシャンズ・ヴァルキリア』を生け贄に、手札から『サイバネティック・マジシャン』を特殊召喚！」

なのはの場にまた新たな白い魔導服を纏った魔術師が現れる。

「『デメンション・マジック』の効果で『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』を破壊！」

「こつも簡単に『ゲイボルグ』がやられるなんて・・・。」

「いくよ！『サイバネティック・マジシャン』でダイレクトアタック！」

「ぐわあっ！ー！」

風斗

LP 3000 600

「ターンエンド！」

「俺のターン！（手札に今モンスターカードは無い。・・・このドロで何か引けなきゃ負けちまう！翔を助ける為にも負けられねえ！・・・デッキよ、俺はお前を信じている！だから、力を貸してくれ！）ドロー！」

カードを今までは1番力強くドロする風斗。

そして、カードを見た時、風斗の顔に喜びの色が浮かぶ。

「よしっ！『死者蘇生』を発動！」

「このタイミングで『死者蘇生』！？」

「なのはちゃんもやけど、風斗君もどんな引きしとんねん！」

「墓地より竜と共に蘇れ！」
『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』！
！」

風斗の場に再び帰ってきた『ゲイボルグ』。

「『ゲイボルグ』で『サイバネティック・マジシャン』を攻撃！トルネード・スパイラル！そして、ダメージステップ時に墓地の『ドラグニティ・ドゥクス』を除外して攻撃力を1500ポイントアップ！」

『ドラグニティナイト・ゲイボルグ』

ATK / 2000 3500

「そんなっ！」

なのは

LP 2000 900

「これでターン終了だ。」

「（風斗君、本当に強い！気を抜いたら一瞬でやられる！でも・・・）
（負けないよ！風斗君！ドロー！」

先程の風斗にも負けないぐらいの力強さでカードを引くなのは。

「・・・！！（来てくれた！）私も『死者蘇生』を発動！墓地の『アーカナイト・マジシャン』を蘇生する！」

だが、風斗はなのはの行動に疑問を覚える。

（なぜ、『アーカナイト・マジシャン』を蘇らせたんだ？シンクロ以外の特殊召喚じゃ魔力カウンターが乗らないのに。）

「このターンで決めるよ！チューナーモンスター！『レイジング・ハート』を召喚！」

なのはの場に赤い宝石が現れる。

「レベル7の『アーカナイト・マジシャン』に、レベル1の『レイジング・ハート』をチューニング！」

赤い宝石が輪になって、『アーカナイト・マジシャン』を包み込む。すると、今までとは違った光が夜の闇を照らす。

「何なのこの光は!？」

「なんかスゲー事になってんな。」

丁度決闘を終えた十代達が帰って来た。

「風は空に、星は天に・・・そして、不屈の心はこの胸に!シンク
口召喚!」

光が止むと1人の少女が立っていた。

「来て! 『スターライト・マジシャン・ガール 星光の魔法少女』!」

その姿はなのはと同じ茶髪をツインテールにして、コバルト色の瞳を持ち、白と青を基調とした服に、下はロングスカートを身に着け、手に金のフレームの中に赤い宝石がついているどちらかというと機械のような杖を持った小学生ぐらいの少女だった。

「とつとつなのはちゃんの切り札が出たな。」

「アレを出すってことは、大分ピンチだったんだろっね。」

(あのモンスター、ブラマジガール並に可愛いッス!)

「『星光の魔法少女』は特殊召喚に成功した時、魔力カウンターを2つ乗せるよ!」

『星光の魔法少女』

魔力カウンター×0 2

「『アーカナイト・マジシャン』に効果が似てるな。」

「このままバトルいくよ！」

「来い！（俺の伏せカードは、速攻魔法『イージーチューニング』。これで墓地の『ブラックスピア』を除外すれば、攻撃力を1000ポイントアップ出来る！なのはの『星光の魔法少女』の攻撃力は2300、だったら倒せる！）、この瞬間、リバースカードオープン！速攻魔法『イージーチューニング』！墓地の『ブラックスピア』を除外して攻撃力1000ポイントアップ！」

『ドラグニティナイト-ゲイボルグ』

ATK/2000 3000

「なら、私も『星光の魔法少女』の効果を発動！このモンスターが戦闘する時、自分フィールドにある魔力カウンターを任意の数取り除くことで、エンドフェイズまで取り除いた魔力カウンターの数×700ポイント攻撃力をアップする！」

「なんだって!？」

「私は『星光の魔法少女』の魔力カウンターを全て取り除いて、攻撃力1400ポイントアップ！」

『星光の魔法少女』

魔力カウンター×2 0

ATK / 2300 3700

『星光の魔法少女』の構えた杖の先に魔力が集中していく。

「全力！全開！スターライト・ブレイカー！！」

溜まった魔力は極太の砲撃となって『ゲイボルグ』のみならず風斗まで飲み込んだ。

風斗

LP 6000

こうして、風斗となのはの決闘はなのはの勝利で幕を閉じた。

「すまねえ、翔。負けちまった。」

「いいっすよ！元は僕の所為ツスから。風斗君は一生懸命決闘してくれたツス！」

申し訳無さそうにする風斗を慰める翔。

「でもよ、この場合ってどうなるんだ？」

「うーん？1勝1敗だからね。明日香ちゃん、どうするの？」
「なのはに聞かれた明日香は、」

「翔君は解放するわ。」

「えっ!？」

「いいのかよ!？」

「ええ、本来なら十代だけ呼び出すつもりだったのよ？風斗が決闘で勝っても負けても翔君がどうにかなることは無かったわ。」

「じゃあ、なんで決闘を？」

「にははは……、私が明日香ちゃんに頼んでそうしてもらったの。」

「でも、なんで……?」

「それは……、風斗君と決闘したかったからだよ!」

笑顔で言い放つのは。

「ハハハ……、それじゃあ、翔は返して貰っていいんだな？」

「ええ、でも次は無いわよ。また、覗きと判断されるようなことがあつたら、即学園に突き出すからね。」

「も、もちろんッス！心に刻んだッス！」

「気を付けるよ、翔。」

「全くだ、こんなのは2度と御免だからな。」

「貴男達もよ！」

「「ハイっ!!」」

「ねえ？風斗君。」

「ん？なんだ、なのは？」

「えっと、また今度私と決闘してくれない？」

「ああ！勿論！次は負けないぜ？」

「あー！なのはちゃん、ずるいわ、私も風斗君と決闘したいのに
」

「私も決闘したいよ。」

「オイオイ、落ち着けよ、俺は誰の挑戦でも受けるからよ。」

「風斗君、羨ましいッス……。」

「何言ってるんだ？翔。」

「……で、デュエルアカデミアの夜は更けていった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2276/>

遊戯王GX ～風の騎士～

2010年10月20日19時16分発行